

ISSN 0910-2396

野鳥たより

—北海道—

第 81 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成 2 年 9 月 21 日



ホウロクシギ 63. 9. 17 鶴川 撮影者 小堀 煌 治

ヨーロッパクロマツとドバトとイスカ

齋藤新一郎

マツの球果と種子に関わる、種子食鳥（ナッツイーター）の話です。

北海道大学のキャンパスを歩いていた時、数年前の、5月末の好天の日であったが、植栽されたヨーロッパクロマツ（欧州黒松）の樹冠から、その種子が風に乗って、目の前に流れてきた。おや、と気付いて、あたりを見渡すと、数本のいずれの木からも、種子がかなり頻繁に飛んでいた。

始めには、何となく、この乾燥した大気の下で、球果の基部に残っていた不稔粒（しいな種子）が、今ごろになって、飛ばされているんだろう、と思っていた。

ところが、近くをちょろちょろ歩いている数羽のドバトが、その飛散する種子を追いかけて、食べているではないか！

私も、それを追いかけて、確かめた——ああ、不稔粒ではない、成熟した、立派な種子なのだ！

すると、ここに植栽されたヨーロッパクロマツは、秋に球果が開くのではなく、この初夏に、一年中で最も空気が乾燥する時期に、球果を開くのだ。湿度が低いといわれる北海道でも、ヨーロッパに比較すると、なお湿度が高く、あちらのマツ類の球果が開くほどの低い湿度には、なかなかならないんだな、と思った。

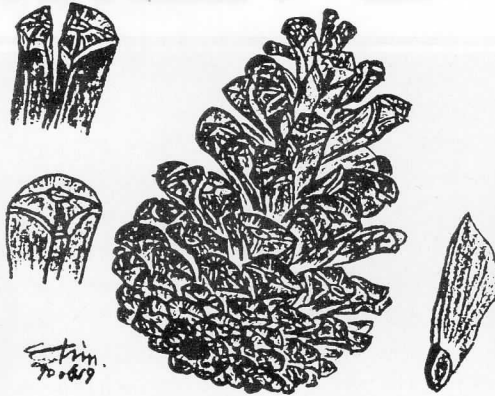
ちなみに、札幌の月別平均相対湿度は、初夏（5～6月）に67～76%、秋（9～10月）に72～75%で、年平均が73%であり、ウィーン（ヨーロッパクロマツの本場）のそれは、それぞれ、68%と73～79%で、年平均が73%である。

以上、第1話は、ドバトに、種子散布の時期を教えられた話です。

次に、この初夏に、6月初めであるが、やはり、好天の北大キャンパスで、ヨーロッパクロマツの球果が、かなりまとまって、地上に落ちていた。サイズは、長さが5～8cmあり、ニッポンクロマツ（日本黒松、雄松；長さ4～6cm）より、やや大きい。

これを標本にしよう、と拾い上げたところ、開いた球果の種鱗が、いくつも、縦に割れていた。地上に落下した際の、ひび割れではない。この種鱗の露出部（鱗甲）を割ったのは、誰なのだろうか？

イスカだ、そう、イスカにちがいない！こんなに固い種鱗を、冬に、球果が開く前に、見事に割って、種子を取り出したのは、イスカなのだ。あの食違いのクチバシは、すごい切れ味をもっているものだ。



ヨーロッパには、3種のイスカがいて、それぞれが、マツ科の別の属種の球果を割って、種子を食べている、とのことである。つまり、クチバシの大きさと球果の種鱗の厚さには相関がある、とみられている。

ハシブトイスカ……ヨーロッパアカマツ
イスカ……ヨーロッパトウヒ
ナキイスカ……ヨーロッパカラマツ

それでは、北海道のイスカ属種は、ただ1種、イスカだけなのであろうか。それなら、彼らは、オールラウンドに、種鱗の厚さに関係なく、針葉樹全般を対象としていることになる。ことによると、ハシブトイスカが飛来しているのかもしれない。

なお、本誌の第64号（1986.6）に、筆者は、カラマツの球果から種子を取り出していたイスカの観察例を、紹介したことがある。

以上、第2話は、球果の食痕から、イスカが北大キャンパスにも来ている、という推理話です。

鳥そのものを観察する、ふつうのバードウォッチングのほかに、こうした樹木サイドからのバードウォッチングが催されてもよいのではあるまいか。

* * *

追記 北大環境科学研の小野有五博士に、この話をしたところ、イタリアのシシリー島のヨーロッパクロマツの球果も、初夏に地上にコチーン、コチーンと落ちる、とのことであった。

〒079-01 美唄市峰延町本町北2

「水辺の鳥」の初心者用識別表

田 辺 至

ベテランには何でもないことでも、初めて水鳥をみる人にとって似たような鳥の識別は大変です。いちいち図鑑を探して、違いを明らかにするのは手間のかかるものです。初心者にも分かるように、似た鳥達を並べて違いを明らかにした表を作ってみました。雌や非生殖羽（エクリプス）の雄の識別は私にはできませんのでしてありません。私も初心者なのでまちがったり、より簡単な識別表がすでに出ているかもしれません。

皆様に教えていただいて完全なものにしたいと思います。なお、この図に図鑑を参考にして色をぬると違いがより明らかになり、現地で使い易いでしょう。

1. カモメの仲間の見分け方

初心者はカモメの群れを見るとみんな同じに見え、童謡の「誰が生徒か先生かー」のように、「誰がカモメかうミネコかー」というわけでさっぱり見分けがつかえません。これは泳いでいる姿だけで判別しようとするから難

しいのではないのでしょうか。カモメ類の識別は時間をかけて、飛んでいる姿や陸にあがっている姿を何度もくらべている間に分かってきます。若鳥は変化が多くて初心者には識別は困難なようです。文中の「↑」は最も良い区別点を示しています。



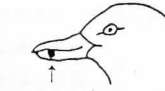
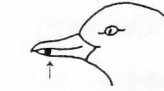





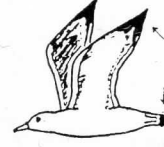

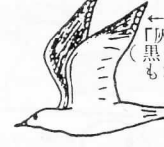
2. 湖沼の水鳥の見分け方





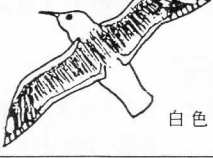


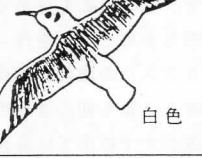
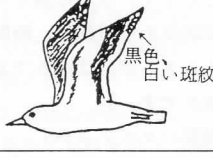






初心者のよくやる失敗は、初めての水鳥を見ると体の一部の特徴だけに注目して、図鑑の図に無理にあてはめて別な鳥にしてしまうことです。水鳥は遠くの沼の端に多いので、20倍位の望遠鏡で、時間をかけて体全体の特徴をくらべるとまちがいはへるでしょう。

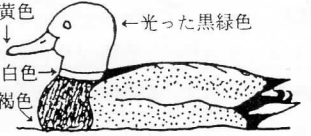


[参考にした本は次の通りです。]


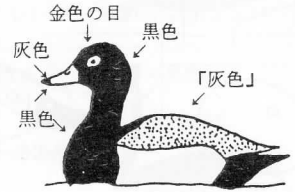


1. 高野伸二著「野鳥識別ハンドブック」
2. 各種の鳥類図鑑


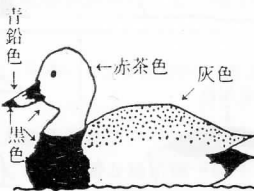
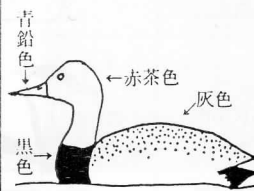
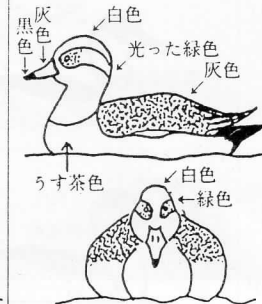
〒072 美咲市西1条南4丁目3-8

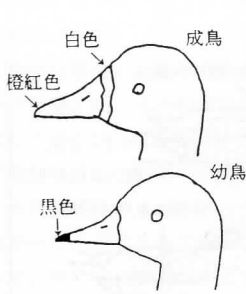
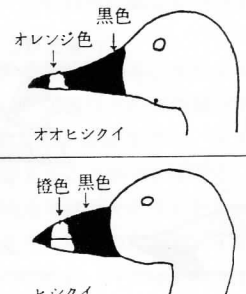
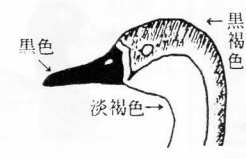
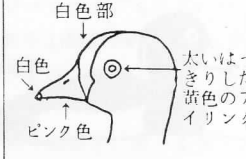
	カモメ	ウミネコ	シロカモメ	ワシカモメ
目と足	「目は黒色、足は黄色」	「目も足も黄色」	目は黄色、足はピンク色	「目は黒色にみえ、足はピンク色」
翼の背の面	青灰色	黒灰色	「うすい灰色（体全体が白っぽい）」	明るい青灰色
くちばし	黄色	黄色	黄色	黄色
(くちばし) (斑点)	 斑点はない	 「先端に赤と黒の斑点」	 先端近くに赤い斑点	 先端近くに赤い斑点
(尾) (色と斑点)	 白色、斑紋なし	 「黒色の帯状の斑紋あり」	 白色、斑紋なし	 白色、斑紋なし
(翼の先端) (色と斑紋)	 「黒色、白い斑紋あり」	 「黒色、白い斑紋なし」	 「白色」(黒色部) 分なし	 「灰色」(黒くも白くもない)
冬羽	後頭部に淡褐色斑点	後頭部は全面的に淡褐色	後頭部に淡褐色斑点	後頭部に淡褐色斑点
夏羽	頭部は白色	頭部は白色	頭部は白色	頭部は白色

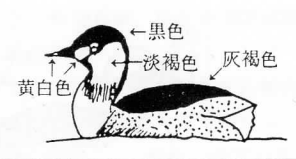





	セグロカモメ	オオセグロカモメ	ミツユビカモメ	ユリカモメ
目と足	目は黄色、足はピンク色	目は黄色、足はピンク色	「目と足は黒色」	「目は黒色、足は赤色」
翼の面	明るい青灰色(オオセグロよりうすい)	青味をおびた黒灰色(セグロよりこい)	青灰色	淡青灰色
くちばし	黄色	黄色	黄色	「赤色」
(くちばし) (斑点)	 先端に赤い斑点	 先端に赤い斑点	 斑点なし	 斑点なし
(尾羽) (色と斑紋)	 白色	 白色	 白色	 白色
(翼の先端) (色と斑紋)	 黒色、白い斑紋	 黒色、白い斑紋	 「三角形の黒色斑」 (白い斑紋なし)	 「黒い線」
冬羽	後頭部に淡褐色斑点	後頭部に淡褐色	 「黒色のリング」	♀羽「黒褐色の顔」冬羽「黒褐色斑」  
夏羽	頭部は白色	頭部は白色	頭部は白色	

見つけたい鳥	似ている鳥	ハシビロガモ (オス)	ヨシガモ (オス)
<p>マガモ (オス)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「頭部は光った黒緑色」 「くちばしは黄色」 目は黒色 「胸部は褐色」 「体の側面は灰色」 「首に白い首輪」 普通に見かける鳥 		<p>A マガモに似ている部分 頭部は光った黒緑色</p> <p>B マガモとのちがい</p> <ul style="list-style-type: none"> マガモより小さい 「くちばしは黒色、長くて先の広がった特異な形」 「目は黄色」 「胸部は白色」 「体の側面は茶色」 普通に見かける鳥 	<p>A マガモに似ている部分 「顔面は光った黒緑色(緑のナポレオン帽をかぶった形)」</p> <p>B マガモとのちがい</p> <ul style="list-style-type: none"> マガモより小さい くちばしは黒色 目は黒色 「胸部は白地に黒の小斑点」 体の側面は灰色 「首に黒い首輪」 「体の後部に白色に黒いくまどりのある飾羽(三列風切羽)」 あまり多い鳥ではない
			

見つけたい鳥	似ている鳥	スズガモ (オス)	コガモ (オス)
キンクロハジロ (オス) ○「頭部は黒色、冠羽がある」 ○「目は金色」 ○「背は黒色、体の側面は白色」 ○胸は黒色 ○くちばしは灰色、先は黒い ○大きさはマガモとコガモの間 ○普通にみかける鳥		A キンクロハジロに似ている部分 ○頭部は黒色、大きさは同じ位 ○目は金色 ○くちばしは灰色、先は黒い ○胸は黒色 ○体の側面は白色 B キンクロハジロとのちがい ○「頭に冠羽はない」 ○「背面は明るい灰色」 ○沼では少ない鳥	A キンクロハジロに似ている部分はない B キンクロハジロとの違い ○キンクロの半分位の大きさ(最小のカモ) ○「頭部は栗色、目より後方へ緑色の斑」 ○「体の側面中央に水平に白線」 ○胸部は白地に黒い小斑点 ○「おしりの三角形の斑(下尾筒)はクリーム色で黒いふちどり」 ○普通にみかける鳥 C アメリカコガモ 「胸に縦に白線」 (体側に水平な白線のないことがコガモとの違い)
			栗色 緑色 「胸に縦に白線」  アメリカコガモ (黒いふちどり) 「体側に水平に白線」  コガモ

見つけたい鳥	似ている鳥	ホシハジロ (オス)	オオホシハジロ (オス)	アメリカヒドリ (オス)
ヒドリガモ (オス) ○頭部は赤茶色 ○「ひたいから頭頂部は黄白色」 ○大きさはマガモより小さい ○「胸部はうすい茶色」 ○くちばしは灰色、先端は黒色 ○普通に見かける鳥		A ヒドリガモに似ている部分 ○頭部は赤茶色 ○大きさは同じ位 ○普通に見かける鳥 B ヒドリガモとの違い ○「ひたいから頭頂部への黄白色なし」 ○胸部は黒色 ○「くちばしは中央部が青鉛色、先端と基部は黒色」	A ヒドリガモに似ている部分 頭部は赤茶色 B ヒドリガモとの違い ○ひたいから頭頂部への黄白色なし ○胸部は黒色 C ホシハジロとの違い ○ホシハジロより大形 ○「くちばしは青鉛色で黒色部なし」 ○くちばしは長くて先が細い ○「頭からくちばしの線がまっすぐで、頭部は三角形にみえる」 ○ごくまれな鳥	A ヒドリガモに似ている部分 大きさと習性は同じ B ヒドリガモとの違い ○「ひたいから頭頂部は白色」 ○「目から後方へ緑色光沢の帯状斑」 ○まれな鳥(ヒドリガモの群の中にある)
				

見つけたい鳥	似ている鳥	オオヒシクイ	ヒシクイ、サカツラガン	カリガネ
マガモ ○「くちばしの根元に白色部」 (幼鳥にはない) (幼鳥のくちばしの先は黒色) ○「腹部に不規則な黒い横じま」 ○「くちばしはオレンジとピンクの中間の色」 ○「足はオレンジ色」 ○ひずんだような高い声でよく鳴き、キヤカカ、キヤハハときこえる	A マガンに似ている部分 ○体と足の色はマガンに似る B マガンとの違い ○大きさはマガンの1.5倍位 ○「くちばしは大きくて長く黒色、先端近くにオレンジ色の斑あり」 ○くちばしの根元に白色部なし ○腹部に黒い横じまなし ○低音の太くひびく声で、ガハハ、ガハハと鳴く C ヒシクイとの違い ○大きな違いは顔つきで、くちばしはすなりと長い	ヒシクイ A 体形、体色、足の色はマガンに似る B マガンとの違い ○「くちばしは厚く、黒色、オレンジ色の斑あり」マガンより体は大形 ○くちばしの根元に白色部なし ○腹部に黒い横じまなし C オオヒシクイとの違い 「大きな違いは顔つきで、ヒシクイのくちばしは短かくて厚い。遠くから見るとヒシクイは三角形のくちばしを顔につけたようにみえる」	サカツラガン ○大きさはヒシクイに似る ○くちばしは長めで黒色、根元に細いすじあり(幼鳥になし) ○「大きな特徴は首の前側(淡褐色)と後側(黒褐色)で濃淡が明らか」ごくまれな鳥。	A マガンに似ている部分 ○体色はマガンによく似る ○腹部に黒い横じまがある B マガンとの違い ○目の大きさはマガンより10cm小さい。 ○「目のまわりにはっきりとした黄色のアイリングがある」 ○「くちばしはピンク色で先は白い」 ○「くちばしの根元の白色部はマガンより上方(頭頂付近)までである」 ○くちばしはマガンより短かく、おでこがでっばっている。 ○休んでいるときのたたんだ翼の先は尾の先をこえる(マガンの逆) ○ごくまれな鳥。
				

	カイツブリ (オス)	ミミカイツブリ (オス)	ハジロカイツブリ (オス)
特徴 体は小形、よく水にもぐる ○「黒いくちばしの先は黄白色、基部に黄白色斑」 ○目は黄色 ○頭部は黒色 ○「夏羽のはおから前くびは栗色」 ○「冬羽のはおから前くびは淡褐色」 くびは他のカイツブリより短い ○よくみかける鳥	A カイツブリに似ている部分 よく水にもぐる B カイツブリとのちがい ○目は赤色 ○くちばしはまっすぐで先端は黄白色 ○基部に黄白色斑なし ○頭は黒色 「夏羽は頭が黒く、くび全体は栗色」 ○目の後方から後頭部へかけての飾羽は金栗色 ○「飾羽は目の後方で斜めに上がる形」(ハジロカイツブリはたれさがる形) 「冬羽はほおと前くびは白色」 ○「頭の黒色部分は目の位置まで」(目の下までではない) ○よくみかける鳥	A カイツブリに似ている部分 よく水にもぐる B カイツブリとの違い ○目は赤色 ○「夏羽のくびは黒色、目の後方へかけての飾羽は金栗色で、たれさがる形」 ○「冬羽のくびの前面は白くない(ミミカイツブリは白色)」 ○「頭の黒色部は目の下までである」 C ミミカイツブリとの違い ○「夏羽の首は黒色」(ミミは栗色) ○冬羽の首の前面は白くない(ミミは白色) ○「頭の黒色部は目の下まで」(ミミは目の位置まで) ○よくみかける鳥	
夏羽			
冬羽			

	ミコアイサ (メス)	カンムリカイツブリ (オス)	アカエリカイツブリ (オス)
特徴	<p>A カイツブリに似ている部分 遠くから見るとカイツブリやミミカイツブリの冬羽に似る</p> <p>B カイツブリ (冬羽) との違い ○「頭部は栗色」(カイツブリは黒色) ○「目は黒色で目の周囲は黒い」 ○「はたと首は純白色」 ○カイツブリの2倍位の大きさ</p> <p>C ミミカイツブリ (冬羽) との違い ○「頭部は栗色」(ミミカイツブリは黒色) ○目は黒色 (ミミカイツブリは赤目) ○くちばしは青鉛色 (ミミは黒又は黄褐色) ○「胸は灰色」(ミミカイツブリは純白色) ○よくみかける鳥</p>	<p>A よく水にもぐる</p> <p>B アカエリカイツブリとの違い ○目は赤色 (アカエリは黒色) ○くちばしは淡赤色 (アカエリは黄色で先は黒) ○最も大形のカイツブリでくちは特に長い ○「目先の黒線はくちばしに届く」 ○「目と黒い頭の間は白色 (アカエリになし)」 〔夏羽〕○冠羽は黒色 ○くびの前側は白色 (アカエリは茶褐色) ○「はとの飾羽は橙赤色で先端は黒い (アカエリにはない)」 〔冬羽〕○「くびの前側の白色と後側の黒色の対比が鮮やか」 (アカエリのくびは淡褐色) ○少ない鳥</p>	<p>A よく水にもぐる</p> <p>B カンムリカイツブリとの違い ○目は黒色 (カンムリは赤目) ○くちばしは黄色で先は黒色 (カンムリ淡赤色) 〔夏羽〕○「くびは茶褐色」(カンムリ前側白色) ○ほおは白色 〔冬羽〕○「くびは淡褐色」(カンムリのくびの前側と後側は白と黒の対比が鮮やか) ○「目の後方に耳形の白色部」(カンムリにはない) ○少ない</p>
夏羽			
冬羽			

話題の鳥たち

井上公雄 (本会幹事)

初めて見た鳥に驚き、美しい鳴き声が忘れられず、珍しい鳥との出会いに感動し、愛らしい幼鳥の姿、時には厳しい自然の中での生命の営み等、人それぞれの野鳥への想いは様々であろうと思います。

今回は今年前半話題になった鳥達の中から、特に注目されたものを取り上げてみたいと思います。

以下は何れも道内はもとより、国内的にも珍しく、且つ貴重な観察及び記録であります。これ等を取りまとめるに当たり関係者の方々の理解と協力を戴き、談話や写真等の提供に快く応じて下さいました。また生態、分布、記録等に就いては新聞、関係文献等を参考にさせて頂きました。

ズアオアトリ、国内初観察

ズアオアトリはユーラシア大陸西部とアフリカの地中海沿岸に分布繁殖し、寒地のものは温暖な地に南下越冬する。4月11日、宗谷支庁利尻町で日本で初めて観察さ



ズアオアトリ 1990. 4. 11 利尻町 小杉和樹

れた。ズアオアトリを見つけたのは、地元の郵便局長・志摩進さん方の雑木林に続く庭先で、スズメ大の見慣れない鳥が地面で採餌（主に種子）したり枝に留まったりして居るのを見付け、鳥仲間の小杉和樹さんに連絡、観察しながら約5米の距離から撮影に成功。日本産鳥類図鑑に載っていないところから他の図鑑を調べ、ズアオアトリと分かった。早速日本野鳥の会本部に紹介、日本にはこれ迄記録のないことが分かり、日本初記録と言う出来事に両氏は興奮を隠しきれなかった。

ズアオアトリは体長15センチ雄は頭部が青、背面は緑がかり胸部はピンク色、雌は殆ど淡緑色と地味、ヨーロッパ各地で多く見掛ける鳥の一種で冬には大群をつくり他種とも混群をなすが、雄雌別々の群れをつくることが多

い。主に草の実、堅果を食し昆虫も採る。

どんなタイプの林でも繁殖し、普通は樹木の茂みのごく低い場所に巣を造る。3-5を産し12-14日主に雌が抱卵、雛の世話は雄雌が協力して行い一度に一匹か二匹ずつのチョウや蛾の幼虫をくわえて運び雛に与える。殆どの鳥類は食物が最も豊富な時期に繁殖するが、繁殖のタイミングは各々が食べる物によって種ごとに異なりチョウや蛾の幼虫を食べるズアオアトリは、晩春に短い繁殖期をもち、種子を必要とするヒワ類は様々な季節に長い繁殖期をもって居るものもある。

アトリ類の雄は自分の縄張りのみで囀り、その囀りは縄張りの宣言と配偶者を引きつける働きをしている。

シマノジコ、51年振りの発見

昭和52年5月長崎県対島での記録の他、秋田、長野、島根、山口、舭倉島、男女群島等、又本道では昭和14年5月、函館での観察以来、実に51年振りの記録となったシマノジコが、昨年5月28日宗谷支庁利尻町で発見された。

シマノジコを発見したのは、利尻郷土資料館に勤務する弘本節子さんと、昨年5月28日午前10時頃、同資料館の裏口のガラス戸に何かがぶつかった音がしたため、付近を探したが何も見当たらず、翌日掃除の時死んでいる一羽の小鳥を発見、珍しい小鳥だったため、利尻町立博物館に届け出た。同博物館の学芸係長西谷栄治さんが図鑑等で調べたところ、シマノジコと分かり、写真撮影し日本野鳥の会本部に判定を依頼、今年になって西谷さんの元へ、検討の結果シマノジコと公式に認定すると返事が届けられた。

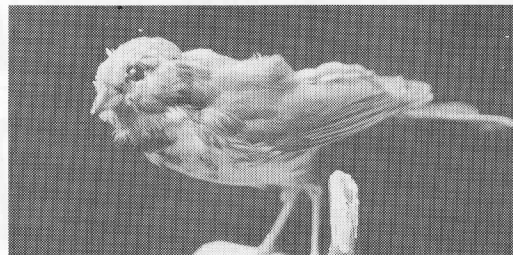
本種は全長13.5センチ雄雌異色、ホオジロ属の中では小さく、雄は顔から上、胸と背、腰まで美しい赤茶色、尾は暗赤褐色、翼は黒褐色、胸から腹など下面は鮮黄色で脇には縦斑がある。雌は上面が暗い緑黄色に黒褐色の縦斑がある、翼と尾は雄と同様、顔から下面が黄色で胸脇には縦斑がある他、頭に眉斑を持つ。雄の冬羽では頭と上胸部は夏羽と似るが背や下面は雌に似ている。

バイカル湖の北西部からシベリア南部をオホーツク海沿岸迄、中国北部、ウスリー、アムールに分布、中国南部に移って冬を過ごす。日本では迷鳥または稀な旅鳥として通過するのみで主に日本海側での記録が多い。

繁殖例はないが、繁殖環境は山地の森林やカラマツ林、巣はホオジロ類に似て、草の株元に網根等で碗形に造る。卵は3-4個を産み抱卵日数は12-14日、在巢日数は12-15日位。

ポロト湖畔に、サンコウチョウ

本州の関東以南に夏鳥として渡来、本道の愛鳥家にとっ



シマノジコ 1990. 8. 16 利尻町 西谷栄治

ては、憧れの鳥の一種に数えられる亜熱帯性のサンコウチョウが、白老町ポロト湖畔の林に居るのが確認され、この様子がNHKのローカルニュースの中で放映されたのが6月8日の朝であった。私もこの映像を偶然見る幸運に預かった一人である。本道では未確認ながら、函館、奥尻、室蘭での記録はあるが、今回の様にビデオに鮮明に収められたのは恐らく初めてではなからうか、発見者の会員本田進氏によると、最近入手したビデオの撮影を兼ねて仕事明けの6月4日ポロト湖に出掛け探鳥中、林の中から、テープ等で聞き覚えのあるサンコウチョウの鳴き声が聞こえて来た。早速声のする林の方を探したところ、茂みの中に居るのが見つかった。これは又とないチャンスと直ぐにビデオの撮影に入り、茂みに留まったり林の中を飛び渡る様子を収めることが出来た。観察の様子から幼い雌と思われる。

サンコウチョウは日本、台湾、フィリピン北部に分布3亜種があり、日本には南西諸島に一年中生息する亜種と中国南西からスマトラ等で越冬し屋久島から本州の平地、低山の森林へ夏鳥として渡来する亜種がある。

全長雄は約45センチ、雌は17.5センチ体重19-29グラム、雄の中央尾羽は非常に長く約34センチ有る個体も居る。頭部、胸は黒色、背面は紫褐色、下面は白色、嘴と眼の周囲は淡青色、メスは尾が短くて（9センチ以下）赤茶色である以外は雄に似る。

繁殖は縄張りを構え高木の細い股に杉等の樹皮で深いカップ形の巣を造り、ウメノキゴケをクモの糸で貼り付ける。日本では5-6月に白色又はクリーム色に有斑の卵を3-5個産み、雄雌交代で12-14日抱卵、雛は晩生性で在巢期間は約10-12日間、巣立ち後は家族群で行動、時々カラ類の混群にも入る。

和名の三光鳥は、ソーキーヒ・ホシ（月・日・星）ホイホイホイと歯切れ良く鳴くところからきたと言われ、雌も時々囀る事もある。平地から低山の林に生息し樹冠部、又はその下で飛翔昆虫を捕食する。

キンメフクロウの営巣国内初観察

1955年1月新潟、本道では1965年4月美幌、札幌1974年5月、鶴川河口での記録を含め9例と少なく、日本での繁殖の記録はない。このキンメフクロウの珍しい営巣の様子を6月25日NHKの全国ネットで放映され既に御覧になった人も多いと思う。

キンメフクロウの発見は2年前に遼り、十勝の山中で見付けたもので、地元の人が鳴き声を聞きつけ、声を頼りに探し回った結果キンメフクロウであることが分かったもの。昨年、今年と初めて確認した付近からの声が続いて居たが、本年5月クマガラの営巣跡と見られる、トドマツの地上8-9米位の巣穴に出入りして居るのを見付け、営巣を確認した。キンメフクロウの繁殖記録がない事から、記録に残したいと考え、6月に入り営巣の障害にならない様、慎重な準備が進められ、6月7日に放映に使用した映像を撮る事に成功した。一週間後、再び現場を訪れて見たが、既に巣立った後で（確認はしていない）であった。以後も鳴き声は聞こえるが、姿は見られない。

営巣の様子を観察した発見者に依ると、雄雌が交代で餌を運び、3羽の雛が巣穴から顔を出して居るのを確認している。大樹の洞穴や裂け目等での営巣をイメージして居たのでクマガラの古巣穴を利用して居たのは意外であった。

本種は全長25センチ位雄雌同色、体の割りに頭が大きく羽角がなくて小形、顔は扁平で白っぽく周囲は褐色で縁どられ、全身褐色で白斑が散在している。

ヨーロッパ中北部からユーラシア大陸の中部を経て、ウスリー地方、カムチャッカ半島及びオルコトルスク岬付近に至る範囲、アラスカ中部からニューファウンドランドに至る北米大陸中部で繁殖し、留鳥の地域が多いが、冬やや南下するものも居る。よく茂った針葉樹林に棲み、日中は茂みの中にひそみ、夜間、活動して小形のネズミ、モグラ類、小鳥等を捕食する。ホーホー、ホーホーと繰り返して鳴く。普通の生息域から移動する個体の多い冬に、北海道での記録が多く、水辺の枯草の上や市街地の路上で観察された例があり、森林のみならず人里に出没する

こともある。

餌とした動物の歯や骨、羽毛等の不消化物はペリットとして吐き出す。一度の産卵は3-6個、抱卵日数は25-30日位、1-2羽で行動し群れはつぐらない。

前述の通り分布域が非常に広く、7亜種を産し同属のものが4種いる。

コウノトリ、各地に飛来

この数年道内にも毎年の様に飛来の情報が伝えられ、今や珍鳥としての扱いから外されてもおかしくない迄になって来ている。今年の第一報は3月11日ウトナイ湖に雌雛各一羽が渡来した。行動を共にする事が多かったことから番と見られ、マコモの群落の中の多くのアオサギと一緒に過ごして居たが、約10日程したところで行方が分からなくなった。

其の後4月10日前後、日高の静内川で確認されているが同じ個体であるかどうかは分からない。

4月12日午後3時頃、稚内市声間の大沼上空を、翼の下半分が黒いコウノトリ5羽が舞って居るのを同所の漁業吉田敬直さんが見つけた。吉田さんは昨年4月8日大沼に2羽、10月初旬に一羽が飛来した時、図鑑を調べて知って居たのと、UHBのカメラマン、NTTの職員等も一緒にビデオに撮る等して確認した。その後10日程居たが、白鳥が北へ渡って行く頃2羽に減り、6-7羽離れた恵北との間を往き来きを繰り返して8月15日現在大沼に滞在して居る。大沼は周囲約8キロ程の湿地に囲まれた水深30センチほどの浅い沼で、シジミ、ドジョウ、エビ、小魚等、餌になる魚介類が豊富で、近年吉田さんが鳴き声、デコイ、白鳥凧等、様々な方法で白鳥の呼び寄せに成功したことで知られて居る。最近公園化の話も進行中で、折角珍しいコウノトリが住む様になった事を思うと吉田さんの胸の中は複雑な模様だ。

何れにしても絶滅を伝えられてから、国内で5羽が同時観察されたのは珍しい記録であろう。

続いて5月13日、私たち7名が、鶴川ヘンギチドリの観察に行った折、一羽のコウノトリが上空を旋回、牧場の草地に降りて暫く休息した後、再び鶴川の上空を飛び回りやがて厚真発電所の方向へ飛び去った。その後5月19日、20日山田氏、同27日わたくし他4名、6月3日山田氏等に依って鶴川で確認して居る。その後の動向については不明であるが、鶴川付近に20日間以上滞在していた事が明瞭になった。

又7月10日の道新は、石狩町八幡で飛翔して居るコウノトリの写真を掲載したが、その後の動向についての情報はない。これ等を、総合的に考えてみると、同一個体の移動なのか、別個体の出現なのかは不明であるが、以上の他にも各地での未確認情報があることから複数の個体が道内に生息して居るものと推察出来、繁殖の可能性も期待されるところである。



雨の中の探鳥会（野幌森林公園）

2. 2. 11 富田 寿一

朝、屋根をたたく雨音に目ざめました。2月だというのにひどい降りです。歩くスキー一式を奮発して期待していたのに何んということか！とにくかく大沢口まで行ってみることにしました。それでも9時になると8名が集まり雨合羽や傘をさして出発。雨の日の森は一層静まりかえってスキーの滑走音と雪を踏む音が響きます。

時々立ち止まって耳を澄ますと野鳥のさえずりが聞こえます。でもこの雨では双眼鏡を取り出す気にもなりません。鳥たちの中には春のさえずりに近い鳴き方をするものがあります。やがてくる春の為にレッスンしているのでしょうか。野鳥の羽根が散乱している所があります。トビやタカの猛禽がヒヨドリを犠牲にしたとのこと。一見平和な森にも生存の闘いが展開されているのです。

途中クマガラの古巣観察の為、コースを少し外して木立の間にスキーを進めます。踏み跡のない雪上を歩くと心が弾みます。ウサギやキツネの足跡が沢山見られますが彼等も踏み跡のない雪面に自分の足跡をつけているのです。間伐された木材の集積場にくると松の臭いがしています。すごく良い香りです。やはり木の香りはどこか懐かしく私たちの心を暖めます。藤の沢の小沢村長さんの「一本ずつでも緑の木を殖したい」という言葉を思い出します。遅れてきた2人が私達の足跡を辿って追いつき今日の参加者は10名となりました。

大沢園地で小休止、大きな木立には沢山の鳥たちがいました。途中あまり鳥に会えなかっただけに皆歓声をあ

げていました。帰りは桂コースを経て大沢口へ向います。2組ほどの歩くスキーの人たちに出会い挨拶をかわします。誰かが「わあー かわいい！」と指さす方を見るとうず巻状の形をした15cmくらいの雪の固まりが見えます。斜面を転がって出来たものです。ドーナツやロールケーキによく似ていて自然の造形の素朴な味わいに皆の顔がほころびます。前を歩いている人が木の幹についている黄緑色のサナギを発見、「誰かこのサナギの名前が解る人はいませんか？昆虫博士はいませんか？」と問いかけます。皆、沈黙……。小声で鳥博士はいっぱいいるんだけどつぶやくのみ、結局サナギの名前は不明でした。楽しく歩いていると大沢口に到着。時間は11時10分頃でした。雨の日の森の異なった趣きに感動し、皆様の暖かさにも触れることができ私にとってまた忘れられない探鳥会となりました。

〒061-14 恵庭市文京町116-21

〔記録された鳥〕トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウガラ、ヤマガラ、ゴジュウガラ、キバシリ、ウソ、ハシボソガラス 以上15種

〔参加者〕新田キノ、佐々木和枝、佐々木友子、渡辺勘治、高橋孝次・洋、富田寿一、大規日出、渡辺紀久雄、井上公雄 以上10名

〔担当幹事〕渡辺紀久雄、井上公雄

探鳥 円山公園

2. 3. 4 永島 良郎

この冬は、日曜日・祭日にかけての出張や帰省（神奈川県藤沢市）が多く、ほとんど何処へも鳥見に行っておりません。今日は久しぶりの探鳥会。少々わくわくしながら……その上少々時間におくれて、出発前のリーダーの方の説明もほとんど聞くことができませんでした。確かこの冬は街に来るレンジャクが非常に少ないとのことのようにでした。歩き始めてすぐの大きな鳥居の近くで少々変わった鳴声を聞きました。“ズンズン、ヒー、ズンズン”。（ヒーはヒガラのように金属的な高い音声。）私はこれ

と同じような奇妙な鳴声を2年前の6月、松の山温泉（新潟県）へアカショウビンを探しに行った探鳥会で聞いた記憶があります。いえ、この2年6ヶ月の間この鳴声を忘れることができなかったのです。

夕方、食事の前だったと思います。たまたま一人で旅館の裏山で聞きました。鳴声の主（鳥）を確認することはできませんでした。鳴声をノートに記録し、その夜リーダーにたずねましたが結論はできませんでした。

隣にいた井上さんに聞いたところ“ヤマガラ”ではな

いかとのことでした。長い間、私にとって忘れることのできなかつた奇妙な鳥が、なんとこんなにも身近な所にいたとは……。その日の夜、家で『野鳥識別ハンドブック』（高野伸二著）を見たところ、この鳥のさえずりには変異が多いと記してありました。

鳥居の先で今度は胸が暖かそうな橙色をした1羽の小鳥を見つけました。私にはこの鳥がなんだか判りません。誰かがアトリだと云う。私の知っているアトリは黒い頭と濃い茶色の背中。このように美しく暖かそうな胸を持った小鳥とは知らなかった。楽しい発見です。

探鳥会も後半の頃、リーダーの方が私の前からいなくなり、気がつく私我先頭を歩いていました。後を見ると細い雪道を長い列で皆さんが歩いて来ます。バカみたいに変な責任感みたいなものを感じて……。先頭の私が何かを探さなければ……。多分リーダーの方はいつもこんな気持ちでおられることでしょう。ご苦労さまです。その時小さな芽が出始めたカツラの枝に小鳥が4~5羽いるのを見つけました。ウソです。よかつた……。少々グラマーで美しいバラ紅色ののどを持ち、争いごとの少い円満なこの鳥が私は大好きです。今日もグットタイミング

で出て来てくれてアリガト。

〒004 札幌市厚別区厚別南1丁目9-5-1173

藤井ビル・ひばりが丘

〔記録された鳥〕コゲラ、オオアカゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アトリ、カワラヒワ、ウソ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上17種

〔参加者〕杉田範男、富田寿一、大坊幸七、佐々木和枝、大橋弥太郎、野口正男・キヨ、高田憲子、斉藤、丸山薫・かおり、田中弘子、国本昌秀、クリストファーモービー、吉田忠勝、新田キノ、逸見康夫、青江 正、永島良郎・トキ江、大川政子、柳沢信夫、武沢和義・佐知子、佐藤博吉、佐々木武己、鎌田玲子、三船幸子、戸津高保・以知子、佐々木友子、田中礼子、山崎芳子、山田良造、榊川 保・弘子、安田美恵子、竹内 強、菊地 坦、山田甚一、霜村耕介・光子、河野千枝子、宮崎まり子、千葉 広、大西典子、佐藤 勇、高橋 洋、林 茂一、井上公雄、氏名不詳2名 以上52名

〔担当幹事〕武沢和義、鎌田玲子

ウトナイ湖探鳥会

2. 3. 25 井上 公 雄

温暖な日が続いた後で、今日は生憎の寒気。湖面を吹き渡る風は冷たい。湖畔にはオオハクチョウ、コブハクチョウ、オナガガモ等が集り岸辺に上ってエビセンをねだる姿も多く見られた。今年の北半球といえば地球規模的異常気象とかで暖冬現象が続く、ガン・ガモ類を中心にした冬鳥の春の渡りが記録的に早く、例年はこの時季が最盛期の筈。湖面の氷もすっかり融け、その大半は数日前、北へ向って旅立って行った後だった。

やや寂しさを覚える水面に、近年個体数の減少が目立つと云うヨシガモ10余羽が一群となり、その一隅にホオジロカモが数羽共に行動しているのが見られた。

トキサタマップから見渡す湖面の至る処に点々と白鳥が浮び、点在するマコモの群落の中に多くのアオサギ、ヒシクイ、マガンが降り、その陰の水面にもオナガガモを主にしたカモ類が群れ、頻りに飛び立ったり降りたりを繰り返していた。ネイチャーセンターに向う道すがらマコモの群落の中でオオワシやオジロワシが見られ、無数のカモ類と共に沢山のオオサギも集り、周辺の水辺にはオナガ、ヒドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、カワアイサ等が右往左往。時折何かに驚いた様に飛び上っては直ぐ降りるカモ、ヒシクイ、マガンの群れ。優雅に飛ぶ

ハクチョウの小編隊。カモの群舞。ヒシクイ・マガンの横列飛翔、雄然と帆翔するオオワシ、オジロワシの姿はいつまで見ても魅力は尽きない。

シギチの中でも比較的早い時季に渡り始めるツルシギも3羽見届けることが出来たが、2週間前(11日)4年連続飛来したコウノトリは、21日以来行方が判らず、期待していた人達を残念がらせていた。

昼食時センターでお世話になり、食後柳沢会長から、鶴川河口に生活排水溝が設置されたことにより、付近一帯の乾燥化が進み、これまでシギチの餌場となっていた河口干潟が大巾に減少している現状が報告された。又山田幹事からこの時季の探鳥情報や話題等についても報告があり、鳥合せの結果26種が記録され解散となった。

〒064 札幌市中央区南6条西11丁目 共済ハウス

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、チュウヒ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、ヨシガモ、コガモ、カルガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、カワアイサ、ツルシギ、シロカモメ、アカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、シジュウカラ、スズメ、ハシボソガラス 以上26種

〔参加者〕須賀盛典、西川喜久世、吉田忠勝、鎌田玲子、永島良郎、田中金作・礼子、澁谷信六・弘子、三船喜克・幸子、泉屋宣志・恵津子、武沢和義、大西典子、小林春美、森田新一郎、富田寿一、己亦ミヨ子、山田良造、戸

津高保・以知子、豊口 肇・美代子、渡辺勘治、井上公雄 以上26名

〔担当幹事〕山田良造、戸津高保

野幌森林公園めぐり

2.4.15 鈴木克司

「春」草木の芽も日一日と大きくなり、野山の鳥獣たちも恋の季節を迎え、特に鳥たちは最もにぎやかで美しい声で鳴いている4月15日。山田・千葉両幹事の案内で福寿草、エゾエンゴサクの咲く野幌森林公園大沢口（中央口）を出発。

今回は集合し会長の今年度の挨拶の時から、ウグイスの声が聞こえ、カラ類は縄張りや、巣作りの材料運びで忙しく飛び回り、100mほど進んだ分岐点までで、エナガを始め沢山の野鳥の姿を観察することができました。

エゾユズリハコースとの分岐点ではヤマゲラが皆に一曲サービスしてくれました。5月にはこの附近で、オオルリ、キビタキが観察されるのですが、今回は見当りませんでした。（この附近5月中旬から6月中旬に掛けて特に注意して観察して下さい。オシドリや営巣があります）。

松川の池を過ぎた処で、ハシブトガラ二羽が、流行の「ランバダ」の様に派手に絡まって落ちてきたのです。シマエナガは特有の協同作業中か？数羽で一生涯懸命巣作りの材料運びをしていました。ゴジュウカラは5mほど先を、チョコ、チョコ歩いてくれ、左手の大木の穴に巣作りの材料運びです。

ミズバショウの白い花を見ながら大沢池に着くと、マガモの声はすれども姿は見えず、やっと柳のブッシュの中に番いのマガモを見る事が出来ました。

大沢園地には11時30分に着き昼食ですが、今回の参加者は60名余りで、昼食を持ってこなかった方も居た様でした。12時5分出発で、大沢口には12時35分到着しました。毎回思う事ですが、昼食後は元気が出るのか、早すぎる位、早歩きですネ。

鳥合せでは、24種が確認されたと報告されました。解散後は、宮島沼へ向われた方も多かったようですが、私は千歳空港に直行し、八重桜の満開の東京に帰りました。札幌では、梅、桜、こぶしの花もまだまだなのにと、ゴールデンウィークに野幌森林公園を歩ける日を楽しみに、明日からの仕事の準備をします。

追記

4月28・29・30日と大沢口から松川の池、大沢池、園

地、大沢口のコースを廻り、オシドリの営巣を確認しました。ポイントは、下り坂、川、カーブ、登り坂の右手の大木で、コースから良く見えます。ただ、この文が皆に読まれる頃は、巣立の頃ではと思います。

〒062 札幌市豊平区平岸4条13丁目7-28 403

〔記録された鳥〕カイツブリ、トビ、ハイタカ、マガモ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマガラ、ヒヨドリ、ウグイス、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、ウソ、シメ、カケス、ハシブトガラス 以上25種

〔参加者〕己亦キヨ子、五十嵐俊子、野口正男・きよ、沢部 勝、鈴木克司、富田寿一、逸見康夫、佐藤延子、田中礼子、青江 正、今野 弘、羽田恭子、栗林宏三、竹内 強、佐々木武己、柳沢信雄、川守田順吉、大西典子、新田キノ、玉田紀美子・義一、菊地キミ子、野坂英三、加茂鉄也、安藤英征・瑠子、泉 勝統、戸津高保・以知子、鈴木良二・あや子、竹内義仁・英子、吉岡孝夫、澁谷一郎、西 諭・早百合、船尾恭子、香川 稔、吉田忠勝、志田博明・政子、大野信明、千葉 広、佐川節子、山内弘美、佐藤博吉、原 幹子、山田良造、永島良郎・トキ江、佐々木友子、福島寿太郎、鎌田玲子、石崎勝也、高橋雅子、井上公雄 以上58名

〔担当幹事〕山田良造、千葉 広



ゴジュウカラ

野幌森林公園

2. 4. 22

藤原 恵美

4月22日、野幌森林公園で行われた探鳥会に初めて参加しました。数年前に、一度見たキビタキの姿が忘れられず、野鳥の絵ハガキや本を買ったりしましたが、どうしても、もう一度本物の姿を見てみたかったことと、我が家にやってくる鳥が、どうもスズメだけではないことに気づき、鳥の名前を覚えたくなったことから、参加してみようと思いました。

当日は、あいにくの小雨。

「鳥がうまく出てくれるといいけれど……。」

などと思いながら先頭の方に、ひたすらついて行きました。

「あれは、アオジ…右のほうのは、シジュウカラ…ほらそこには、ヤブ（ヤブサメのことだそうですね）が…」と先頭の方のすばらしい聴力（初心者の中にはそう思えたのです。）と説明に、まだ鳥の事については整理されていない私の頭は、少々混乱気味。

この日観察された33種の鳥のうち新しく覚えたのはイカルキーキーの鳴き声一つというなさけなさ。なかなか覚えられそうにありません。これは、回数をこなして覚えるしかないようです。

我が家にやって来る鳥たちを見て楽しめるよう、又、あこがれのキビタキにもう一度会えるよう、機会を見て、また探鳥会に参加してみたいと思います。

〒065 札幌市東区北22条東22丁目1の13

〔記録された鳥〕カイツブリ、アオサギ、トビ、ハイタカ、オシドリ、マガモ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、トラツグミ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ウソ、シメ、イカル、ニューナイスズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上33種

〔参加者〕高橋 洋、笹谷敏郎、山崎芳子、竹内義仁・英子、近江博次、菊地キミ子、クリストファー・モービー、遠藤晴秀・勝子、堤 茂、高橋教子、宮田幸治、福村ケイ子、泉 勝統、永島良郎・トキ江、岡田康熙・よしみ・紀子、佐々木武己、大槻日出、福岡研也・玲子、高尾満、佐々木友子、志田博明、矢野昭二・玲子、富田寿一、澁谷弘子、新田キノ、藤原浩一・恵美・はるみ、難波茂雄、高橋典彦・久子、霜村耕介、佐々木和枝、今野 弘、大野信明、三船幸子、戸津高保・以知子、高橋昭三、吉岡孝夫、野口正男・きよ、本橋孝之・了子、國島達夫、白澤昌彦、榎川 保・弘子、井上公雄、澁谷一郎 以上58名

〔担当幹事〕戸津高保、大野信明

野幌森林公園

2. 5. 6

越塚 清一

「鳥見三昧で行くぞ」と意気込んで迎えた今年のゴールデンウィーク。ところが、天気ぐづつきっぱなしで悔しい日を一日また一日と過ごした。やっと好天に恵まれた最後の六日、野幌森林公園の探鳥会に参加させていただいた。早朝から胸がわくわく、心うきうき。

とはいえ、私の「探鳥歴」はわずか半年ちょっと。山歩きにはちょいちょい出かけていたのだが、野鳥に興味を持つようになったのは昨秋で、探鳥会の催しが近所の西岡水源池であることを知って出向いてからだ。冬の間、西岡、円山公園、そして苫小牧のウトナイ湖、北大演習林に足をのぼすなど、鳥を見ることのおもしろさにぐんぐん引き込まれて行った。探鳥会のつど新しい発見があるからだった。

この日の野幌の森は美しかった。前日の雨があがった

ばかりで、目に入るものはすべてみずみずしく光っていた。アオジ、キバシリ、シジュウカラなどの姿とさえずりは心をなごませてくれた。遊歩道わきには数々の野草が咲き競い、ヒトリジズカ、ニリンソウのかれんさにはたびたび足を止めた。

どきっと胸が高鳴った瞬間があった。それはメジロの鳴き声を耳にした時だった。どなたかが「メジロのさえずりですよ」「ほら、聞こえるでしょう」と、私に教えてくれた。ちょっと深い沢のところだった。「チー」とか「チーチュル」と鳴き声が伝わってくる。

この時、ほろ苦い遠い記憶がよみ返し、胸の鼓動が高まった。三十数年前の少年時代。栃木県の農村で生まれ育った私は、メジロを飼っていた。小学校の校門前で下校の子供たちを相手に商売していた小鳥屋のおじさんか

ら買ったもので、自宅の庭の柿の実、畑からとってきたサツマイモをふかしたものを与え、とてもかわいがっていた。

晩秋の晴れた日、友達と二人で近くの雑木林にメジロとりに出かけた。持参したメジロを入れたかこの上部に、小枝を止まり木に見せかけてくり付けた。それには、俗に言うとりもちをたっぷり巻き付けた。これがとても強く粘着力を持っている。こうしたしかけを施した鳥かごを、アカマツかなんだったか、ほどよい高さのところに吊り下げ、悪童二人は茂みに身を隠した。私のメジロは「チー、チー」などとよく鳴いた。一時間位も待たろうか、この美声につられて一羽がやって来た。例のとりもちの付いた小枝にびよんと…。そのとたん、奴は身動きができなくなった。悪童二人は茂みから飛び出し、先にかごに駆け寄った私とそのメジロをわずかみにして力まかせに引っ張った。驚いた。胴体は手にしたのだが、片方の足がとりもちの枝にくっついたまま取り残されているのではないか。足をもいでしまったのだ。強い恐怖心が走って、手にあったメジロをその場に捨て、鳥かごだけを持って逃げ帰った。

この「メジロ事件」は、私の胸に消えることなく残った。鳥見のつど、メジロに出会ったら、少年時代の罪の許しをこおう、といつも思っている私だ。だから、野幌での「メジロの声だ」の言葉に、私は全身を耳にした。しばらく立ち止まって鳴き声のする木立ちに目をこらし

たが、姿を確認することができなかった。

本州では留鳥だが、本道では夏鳥という。陽気もよくなったので、近いうちメジロ君にはお目にかかれるだろう。昔、お前さんの仲間に申し訳けないことをしてしまったんだーと謝ろうと思う。早く胸のしこりをとききたい。

〒062 札幌市豊平区西岡1条10丁目11-31

〔記録された鳥〕カイツブリ、アオサギ、トビ、ハイタカ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、モズ、ルリビタキ、クログミ、ヤブサメ、ウグイス、キクイタダキ、キビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス 以上29種

〔参加者〕船尾恭子、吉田慶子、福田房夫・アキヒロ・タカヒロ、高橋昭三・教子、高岡善五郎、沢部 勝、柳沢信雄・千代子、矢口兼江、宮田 久、福田美由喜、大庭竹雄、新妻 博、中山弘道、菊地 清・キミ子、佐々木武己、笹谷敏郎・幸代・圭子・京子、新田キノ、増田光紀、浪田良三、鎌田玲子、栗林宏三、野口正男・キヨ、難波茂雄、山田良造、千葉 広、永島良郎・トキ江・麻子、香川 稔、佐々木和枝、高尾 満、鈴木克司、森田新一郎、腰塚清一、大西典子、今野 弘、澁谷一郎、犬飼 弘、野坂英三、佐々木友子、川守田順吉、井上公雄 以上51名

〔担当幹事〕井上公雄、永島良郎

鳥たちとの出会い（千歳川）

2. 5. 12~13

京 田 智 子

自然の豊かな所に永年住んでいながら、鳥の事などなんの関心も持たずいままで過しておりました。家を新築して三年、それまで気づかずいた光景が窓からおもいきり目に入ってくる様になり、こんなにも身近に鳥たちがいたのかと驚いてしまいました。「アラ！」あの鳥今日も来ている」何んという鳥なのだろう？さっそく図鑑で調べてみると「ヒヨドリ」だったのです。何んとか鳥を呼び寄せたいとあり合せの餌台を置いてみました。気持ちが伝わったのかやがてムクドリ・カラ類・カケス等が……昨年は待ちに待ったキレンジャクが訪れてくれたのです。300羽はきていたでしょうか。早朝から庭近くの木に止まり「シリシリ」と澄んだ声で鳴いているのです。くずパンが容易に手に入った事も幸いしたのでしょう。キレンジャクに加里、ベニヒワ、シメ、アトリ……それはそれは見事なものでした。

今年もぜひ来てほしいものとリンゴも用意し心待ちにしておりましたが残念ながらキレンジャクは姿を見せず、

とても寂しい冬でした。

この寂しさがキッカケになったのでしょうか。待っているだけでは限られています。野外に出て「多くの鳥を見てみたい」という気持ちが「探鳥会に参加してみよう」という気持ちになったのです。

12日午後7時集合のサンポートガーデンには、すでに沢山の方々が集まっておりました。和気あいあいとジグスカンを囲みながらお話を伺うたびに、初心者の方がこの席にいるのが場違いの様な気にもなりましたが、明日出会う事ができる鳥たちを夢みて早めに休みました。

サア！早朝4時出発です。天気は上々、小鳥のさえずりが一斉に耳に入ってきます。「ホオジロ」「オオルリ」をいく度となく望遠鏡でのぞかせていただきました。鳴き声はもうすっかり忘れていました。「ニュナイスズメ」の木の上での交尾には、見てはいけないうつろいを見た様なすまない気持ちでのぞいてしまいました。「ヤマセミ！」の声に思わず歓声を上げ、すぐ図鑑で確認。のどもとの

キイロが鮮やかな「キビタキ」幸運にも見る事ができたという「カワアイサ」、沢山の人に驚いたのか木の上で「見てくれ」といわんばかりに大きな声でさえずっていた「ヤブサメ」、出会い鳥大半が初めてです。参加して本当に良かった。こんなさわやかな世界があったのです。私には20数種の出会いでしたが、素晴らしい収穫でした。快い疲れの中、ぜひまた参加したいものと家路につきま

〒005 札幌市南区石山2条3丁目14-19

＜記録された鳥＞アオサギ、トビ、オオタカ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、カワアイサ、コウライキジ、ヤマシギ、オオジシギ、キジバト、ツツドリ、アオバズク、ヤマセミ、カワセミ、アカショウビン、アリスイ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、カワガラス、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガ

ラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、イカル、ニュウナイスズメ、ハシボンガラス、ハシブトガラス 以上55種。

未確認 コルリ又はコマドリ

＜参加者＞鷺田善幸・直樹、栗林宏三、清水朋子、佐藤隆八・隆博、豊口 肇・美代子、小堀煌治、大西典子、戸津高保・以知子、吉田忠勝、京田信雄・智子、佐藤ケイ、柳沢千代子、見延誠一、板垣定親、野本節郎、マーク・アンドレ、バーバラ・アンドレ、小野有五・妙子・林太郎・あずみ、志田博明・政子、堀内 進、田中礼子、榊川 保・弘子、永島良郎・トキ江、吉岡孝夫、鈴木正之・泰子、川守田順吉、大沼 裕、齋藤正本・真依子・依利夏、今野 弘、富田寿一、黒川幸江、白澤昌彦・光明、宗澤美佐子、道川 弘・富美子、千葉 広、竹内 強、鎌田玲子、菅沼郁子、善本洋子、三浦美重子、井上公雄 以上57名

＜担当幹事＞柳沢千代子、井上公雄、千葉 広

探鳥会に参加して（植苗）

2.6.10

佐藤 幸典

久しぶりの探鳥会の参加でした。いつも、必ず参加するのは新年会だけ。今回はリーダーの山田良造さんの勧めもあり参加しました。

前日は雨だったのですが、今日はビーコンの晴天です。植苗は自分にとって初めての探鳥地で、シマアオジが写せたらと期待していました。

植苗は草原の鳥を見るのに非常に適した場所であると感じました。数はそんなには出ませんが目的のシマアオジやノゴマも見れました。また、コヨシキリは一生涯懸命歌って我々を楽しませてくれました。

一番感動したのは夏羽のアカエリカイツブリのつがいを見れたことでした。少し遠くでしたがスコープで見るとはっきりとアカエリカイツブリと確認出来ました。

今度は鶴川の探鳥会に参加させてもらい、シギチを勉強しようと思っていますのでよろしくお願いします。

〒068 岩見沢市駒園7丁目44-37

〔記録された鳥〕アカエリカイツブリ、アオサギ、トビ、コブハクチョウ、マガモ、カルガモ、コウライキジ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、ショウドウツバメ、ヒヨドリ、ノゴマ、ノビタキ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、シジュウカラ、ホオジロ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、ハシブトガラス、ダイサギ 以上33種



P. L シマアオジの交尾

〔シマアオジの交尾 片方の翼をあげて2羽でぐるぐる回り、時々メスが胸を地面につけて首をあげ、あいさつをするようなしぐさをする。このような事を何回もしてから交尾に入った。 遠藤幸子〕

〔参加者〕高橋久子、飯山五玖子、佐藤正秀・正孝、永島良郎、高橋典彦、山田良造、三船幸子、佐藤幸典、遠藤 茂・幸子、大槻日出、竹内 強、泉 勝統、大西典子、佐々木武巳、榊川 保・弘子、石橋孝継・美津子、今野 弘、武沢和義・佐知子、本橋孝之・了子、丸山 薫、吉田忠勝、澁谷信六・弘子、戸津高保・以知子、田中金作・礼子、佐藤義将、今田健一郎・澄子、豊口 肇・美代子、堀内 進、鎌田玲子、千葉 広 以上41名

〔担当幹事〕戸津高保、山田良造



〔ウトナイ湖〕

平成2年11月11日(日)

渡り鳥の休息地として知られるウトナイ湖に、冬の使者オオハクチョウをはじめ、ガン、カモ類が集結します。又、弱った

カモたちを狙ってオオワシ、オジロワシも飛来します。この鳥たちを見ながらネイチャーセンターまで歩く探鳥会です。昨年はミミカイツブリ等28種記録されました。

湖畔は寒さが厳しいので暖かい服装が必要です。午前9時40分、ウトナイレイクホテル湖畔側集合です。

道南バスが千歳空港から9:10分発苦小牧行があり、ウトナイ遊園地下車です。

帰りはウトナイ遊園地発千歳行が13:24分と14:14分があります。

〔小樽港〕

平成2年12月9日(日)

道央最大の海鳥観察が楽しめるすばらしい探鳥地です。野鳥の会小樽支部と合同の探鳥会で、バスで移動しながら祝津から小樽港各埠頭を巡るコースには、ホオジロガモ、シノリガモ、コオリガモ、ウミアイサ、ハジロカイツブリ、ヒメウ、オオセグロカモメ等が確実に見られま

す。昨年はオオハム等29種記録されました。

海岸は寒いので防寒(帽子、手袋など忘れず)に留意して下さい。バスで移動しますので参加費700円程必要です。

午前10時00分JR小樽駅待合室集合です。

〔藤の沢〕

平成3年1月20日(日)

真白な雪に包まれた小島の村白鳥園で、バードテーブルに来るハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ヤマガラ、アカゲラ、カケス、ヒヨドリ等留鳥たちを間近に見る探鳥会です。又、小島の村名誉村長小沢さんを囲んでの野鳥談義や昼には豚汁を用意し、ゲーム等遊び心で一日を楽しみます。

なお参加費500円程必要です。

午前10時00分白鳥園集合です。

定鉄バス 定山溪線 藤の沢下車、徒歩20分

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

平成2年11月4日(日)

12月2日(日)

午前9時00分 大沢口駐車場入口集合です。

余程の悪天候でない限り行きます。

探鳥会の問合せは011-551-6321 井上宅まで。



◆創立20周年記念ネクタイピンとタイタックの発売

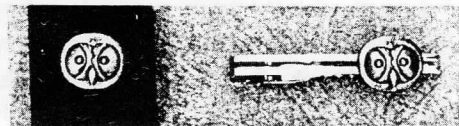
本会の創立20周年を記念して、本会のシンボルマークである「エゾフクロウ」のネクタイピンとタイタックを製作しました。

ご希望の方は、郵便振替(小樽1-18287)でお申込みください。

代金は、ネクタイピンが1個800円、タイタックが1個700円で、個数により次の送料を合計してご送金ください。

<送料>

1個:120円	19個以上:市内410円
2~3個:175円	道内・青森510円
4~9個:250円	その他地域670円
10~18個:360円	



「北海道野鳥愛護会」の名前入りカレンダー(1991年)が出来ます。

日本鳥類保護連盟が野鳥をテーマとした写真を募集し、その中から13点をえらび、月めぐりで、サイズはB3判(52cm×36cm)、どの月にも北海道野鳥愛護会名が入ったカレンダーです。

あなたのお部屋に、あるいはお世話になった方、大切な方への贈り物にぜひどうぞ。

一部800円(送料別)、購入を希望される方は顔見知りの幹事へ申し出てください。

各幹事さん取りまとめのお世話をお願いいたします。幹事がわからない方は(011-851-6364、柳沢へ)、どちらとも10月15日(月)までに申し出てください。

表紙	スズメ	7月	メボソムシクイ
1月	タンチョウ	8月	エリグロアジサシ
2月	モズ	9月	ノビタキ
3月	メジロ	10月	シジュウカラ
4月	ゴジュウカラ	11月	マガン
5月	ヤマセミ	12月	コミミズク
6月	コサギ		

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円(会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287

☎060 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465